1．新たな産業としてのミュージアムの可能性とそのマネージメントを構想する

～フィールドミュージアム美山町の成功からみた新たなミュージアム構想～

ミュージアム工学研究所　樹　井　喜　孝

1．はじめに

冒頭、「産業としてのミュージアムの可能性と～」という一見刺激的で、これまでのミュージアムの概念には存在しないと思われる視点からアプローチしたのは、バブル経済に代表されるような実体経済とかけ離れた経済活動 のあり様や、ここ数十年の間、人々が信じ込んできた経済的価値の拡大イコール社会の発展と捉えている価値観に対するアンチテーゼと、社会問題化している教育の荒廃に対するミュージアム活動からのアプローチであり、教育や生涯学習という概念に含まれている、根源的な課題としての人格形成に関わる内的発達を促すための学習のあり方を探り、それぞれの地域の文化に根ざした人間の営みを取り戻さなければならないという認識がベースになっている。

本論は、美山町で行われている活動について、単に博物館活動という施設を中心にして行われている活動について、形式論的な視点からその構造を考察しようとしたものではなく、地域全体の状況を「ミュージアム文化」として捉え、倉田・加藤両氏のいう社会と博物館活動との関連を明らかにしようとする「博物館社会学」的見地から眺めようとする立場である。

倉田、加藤の両氏は、「博物館と社会」の中で、「博物館社会学とは、博物館と社会学との諸問題を対象とし、それを領域とする学問であり、博物館学体系の一環をなす基礎科学の一つであると考えられる。」事を示し、わが国の博物館の発展のためにもこの分野での研究の必要性を述べ、その研究課題を、「博物館組織」、「博物館の環境」、「博物館地域社会」とした。また、その研究方法としては、「哲学的方法」、「歴史的方法」、「科学的方法」をあげている。（＊1）

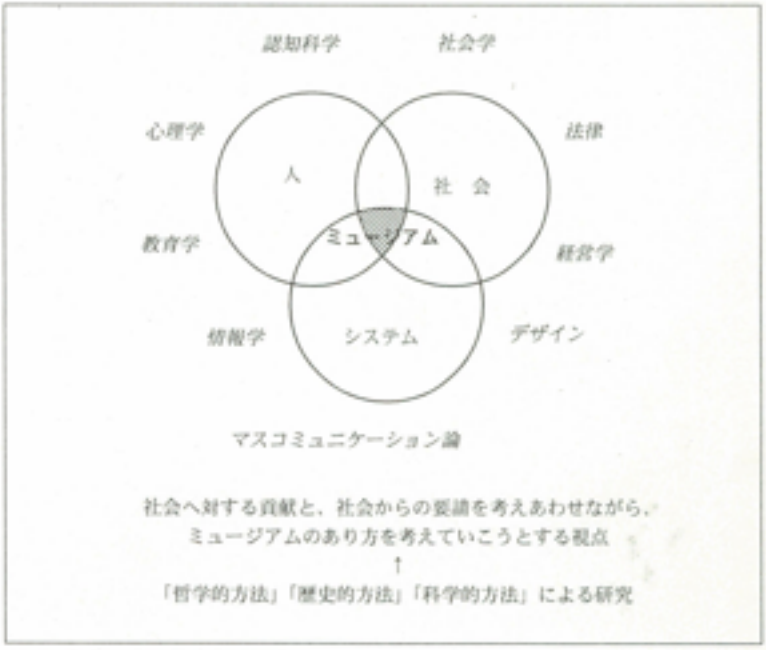
本論では、美山町の事例を「ミュージアム文化」として捉えると共に、博物館社会学的見地から見た「博物館の環境」および「博物館地域社会」の課題として捉え、「哲学的方法」と「科学的方法」によって考察した。

これらの視点から眺めた時、美山町の事例の中に「産業としてのミュージアムの可能性とそのマネージメントのあり方」、あるいは、それらの活動に内在している「人格形成に果たすミュージアム活動の視点」が見えてきた。

以下、美山町の現況や沿革、あるいは、将来的な方向にも触れながら、なぜ、美山町の活動が成功しているのかといった点を、変容しつつあるミュージアムの概念なども考察しつつ、「産業としてのミュージアム」の可能性とそのパラダイムを探る事とした。

（図－１参照）

図－1　博物館社会学（試論）の視点



2．フィールドミュージアム美山町の沿革と現状、活動の状況

美山町は、京都府のほぼ中央に位置する由良川ぞいの山間地域である。京都駅から車で約１時間半、古くは京都と日本海（小

浜）を結ぶ交易のため、若狭街道（さば街道）沿って開かれた町である。現在の人口は5,478人、高齢者（65歳以上）の総人口に占める割合も26.8％と高い。主な産業は林業であったが、現在は低迷している。（＊2）

美山町には、京都大学農学部の演習林である芦生原生林、由良川の清流、唐戸の渓谷といった豊かな自然景観と茅葺き民家が多く残り、古くから伝わる民俗芸能等、素朴な農村風景が残る地域でもあり、そのような日本の農村の原風景を求めて訪れる人も少なくなかった。しかし、基幹産業の衰退とともに過疎化が進む町に変化があらわれたのは、今から10数年前である。最もまとまって茅葺民家が現存する北地区を中心に、自分達の生まれ育った村の景観を何とか残していけないものかと、そこから本格的な茅葺民家の保存を核としたこの地域の取り組みがはじまった。民家保存にいたるまでの経緯は表－1のようになる。現在、北地区においては、26棟（主屋23、納屋3）の茅葺民家が対象となり、全国でも残存率は第1位である。

具体的な事業として取り組んだ平成4年以降、この地域は大きく変化する。事業取り組み前のこの地区への流入人口は年間3,000～5,000人であったが、現在では50,000～60,000人にのぼり、美山町全体での観光客は年間約45～50万人を数える。

この地域での暮らし自体にも変化が現れてきた。農村での生活を求めてJターンやUターン現象が生まれ、若い世代がこの地域に移り住んできた。また、新たに民家の屋根を葺く茅葺職人が4人、山仕事に関わる人々が約25人に増加し、茅葺き産業や伝統の復活に取り組む新しい動きが生まれた。また、養鶏業や酪農に取り組み、ハムやソーセージづくりを始める若者も出てきている。

現在この地区には141人、50世帯弱が暮らす。表－2には、美山町がフィールド・ミュージアムとして現在取り組んでいる活動と今後展開する予定の活動を示す。この地区では、すべての世帯が「かやぶきの里保存組合」に入り活動を展開している。運営は、共同事業や共同施設ごとに住民それぞれの役割が決まっており、民俗資料館（6名）。レストラン（8名）、公民館（きびグループ＝生産グループ　12名）、宿泊体験棟（6名）、かや収納庫（かや組合＝茅葺世帯22戸）のグループで活動している。また、宿泊の受け入れにも取り組み、萱葺き屋根の民家を宿泊施設とした民宿が3棟、計30人が宿泊可能である。

表－1　重要伝統的建造物群保存地区選定までの経緯

昭和47年	文化庁による集落・街並み調査実施
昭和50年	北地区八幡宮本殿、鎮守の森環境保全指定文化財登録（京都府）
平成元年	伝統的建造物群保存対策調査実施
平成2年	伝統的建造物群保存対策調査報告書刊行　教育委員会との協議スタート
平成4年	美山町伝統的建造物群保存地区条例制定に向けて地元説明会開催
平成5年	重要伝統的建造物群保存地区に選定（全国36番目）
平成4～5年	民俗資料館整備、集落保存センター（レストラン）建築　写真展開催　出版等

表－2　美山町フィールド・ミュージアムの活動

現在行っている活動（平成10年度）	今後展開する予定の活動
・かやの里祭	・炭焼き体験、わら細工等
・知井の山を考えよう	－村の年寄りから学ぶ－
－山との付き合い、暮らしを考える－	そば打ち教室
・わら細工教室	・木工教室
・かやぶきの里の民俗	・まつり、イベント等
－山の神信仰・行事・仕事唄から－	・若狭街道ウォーキング
・夏休み田舎体験教室	－さば街道を歩く－
等	・講座・出版活動　等

3．美山町フィールド・ミュージアムの今後

これまで、美山町フィールド・ミュージアムの現状について述べてきたが、全てが順調に進んでいるという事ではない。例えば、この活動の基本的条件として、重要伝統的建造物群の保存という方向が決まっているが故に、これまで活動の主体となってきた住民に続いて、この活動を受け継いでゆく次世代の人達の養成や、理念の継承という問題がある。美山町はこれらの活動を実現させる人材がいてこそ成立し得たのである。美山町の場合は、その点でのキーパーソンの行動についても十分に考慮すべきである。そのキーパーソンは、「教える」というのではなく、いかにすればこの活動の理念を自らのものとして「気付いてもらえるか」という点に腐心されていた。

人間という種は、機械ではないのであり、単に手続き的な知識を獲得したからと言って、その事の本質を理解したという事にはならず、まして、来町者という人間を相手にした活動であればなおさらである。単に美山町の重要伝統的建造物群についての理解を深めてもらったり、生活文化を情報として学んでもらえれば事足れりという事ではなく、住民との交流といった状況を体験する事が、非日常的な感動につながり、その事によって学びがより確実なものとなって、思い出が形成されるというメカニズムを認識しなければならない。

来町者を増やし、リピーターを確保するためには、感動体験に裏打ちされたそれぞれの個性ある思い出作りにつながるメカニズムが重要であり、その思い出がキッカケとなって再度訪れようとする気持ちを引き起こす。それゆえに人的交流の豊かさというものが、ここでは重要な要素であると考えられる。

もう一つの例としては、経済的な面からの、参加・体験プログラム充実の問題である。これまでの様な、わら細工教室や料理教室の他に、炭焼き体験、木工教室など、住民自らがメンバーとなっている様々な部会から考え出される様々なアイデアが、今後の活動の成否を握っていると言っても過言ではなく、経済的な「富」を生む仕掛けづくりがキーポイントであると言える。

また、萱葺き屋根の民家を宿泊施設とした「グリーン・ツーリズム」の考え方を取り入れているという点は、この地域の特性を活かした経済基盤の充実に寄与できるプログラムとして評価できるが、現実的な問題として、西欧において「グリーン・ツーリズム」が成功している背景には、素泊まりを基本とした宿泊形式があり、日本人の「お風呂好き」と「朝食付き」といった事への要望の強さから考えて、現状の「グリーン・ツーリズム」を独立した事業として成立させるには困難な面があり、解決策のひとつとして、町営の温泉施設の整備などが望まれている。

フィールド・ミュージアムの活動を今後も継続的に発展させるためには、より一層地域の文化的な魅力を引き出すための参加・体験プログラムの充実や、日本型のグリーン・ツーリズムといった仕掛けづくりが行われる必要があると思われる。

次項以下、これらの状況を見つめ、そこに内在しているフィールド・ミュージアムとしての要件や、地域活性化という視点からのミュージアム活動の特質、あるいは、“ミュージアムというシステム”そのものから生み出される「富」の概念などについても考察してみる。

キーパーソンである民俗資料館館長（中野文平氏）

4．フィールド・ミュージアム成立の要件

美山町北地区がこれまで、フィールド・ミュージアムとして成立していると思われる要件を整理すると、表－3の様にまとめられるが、住民は、文化庁の重要伝統的建造物群の選定を受けるにあたって、全住民の意見集約を行なっている。この指定を受けた事によって、将来にわたって日常生活が規制される訳であるから、その決断にあたっては相当な決意が成された事が想像できる。結果的に住民は伝統の保存と将来の生活とを比較し、結局、文化庁の選定を受けるという形で他地域との差別化を図る道を選び、それも文化的な価値づけを強化してゆくという方向を選択した。

表－3　フィールド・ミュージアム成立の要件

・内発的、自律的な考え方と住民自身の行動
・対象としての地域、独自の生活文化
・茅葺きの民家、山と川の自然、
・美しい山村の景観、または町並み
・伝統の再構築、ある時代の生活文化：「時」の保存
・キーパーソン的人材
・様々な町づくり勉強会
・受け入れプログラムの工夫
・学び合いのコミュニケーション

この一連の合意形成に至る過程を見た時、あるキーパーソン的な住民の存在を無視する事はできない。彼は、約10年にわたる関わりの中から、地域住民の意見ばかりではなく、ここを訪れる文化人や知識人、あるいは、マスコミ等、各種各層の人々の意見やアイデアを聞きながら、この地域のあるべき方向を探ってきた。

単に、一地域の問題として伝統的建築群の保存を捉えるのではなく、社会の動きや人々の意識、自らの生活のありようまでも意思決定の要因として考慮しているという点においては、地域社会の発展と生活文化のあり方を考える上でも示唆に富んでいる。

同地区が、フィールド・ミュージアムと呼べる形態になった事についても、何かモデルがあって、それに従って整備してきたというのではなく、外部の要望を聞き.住民自らが学び、いかにすれば伝統を保存しつつ、生活を安定させ、来町者に満足してもらえるのか、この地域の特性を活かしたサービスのあり方とはどの様なものなのか、という視点から進められてきたのに過ぎない。結論が最初にあってそれに合わせたのではなく、住民の活動が生まれて、その結果が今の姿になったのだというキーパーソンの話は、地域活性化をすすめる上でのソフトの大切さと共に、住民の意識向上の大切さ、拙速に走る事のない計画の進め方の重要性を物語っているのではないか。

美山町の林業と、茅葺き屋根の民家、中山間地域という地理的条件が重なり、近代化という時代の波を被らずに今日まできた事は、取り残されたがゆえに独自の伝統や生活文化を保存するという機能を果たした。

参加・体験プログラムにしても、住民自身が持っている昔ながらの知恵と技術をベースにした事によって、地域性や独自性が生まれるという可能性を生み出した。（結果はこれからであるが）

新たな茅葺き職人の誕生や林業従事者の増加という現象も、「もの」のみの展示や保存、調査研究にのみ集約されていくこれまでの博物館では果たし得ない機能であり、「もの」を保存する上においての「技術の保存と継承」という事の大切さを改めて示している。

本論の事例は、結果的にフィールド・ミュージアムという枠組みが形成された事によって、茅葺きの民家や地域の生活文化といった伝統文化などが、単に守るべき遺産という事に終わるのではなく、地域外の人達にとっては生きた学びの対象であり、技術の保存と継承の場として今日に生まれ変わり、生活の中に根ざしつつ伝統の再構築が図られた事を示している。

5．近代化論、内発的発展論からミュージアム・マネージメント論へ

以上、これまでの経過や今後の方向、あるいは、フィールド・ミュージアムとしての要件などについて述べてきたが、本論の主題である「産業としてのミュージアム」を論ずる前に、地域開発手法としての「近代化論」と「内発的発展論」とに触れ、その後、産業としてのミュージアム・マネージメント論に触れたい。

わが国における地域の発展・活性化は、その多くが西欧及び米国の経験に基づいて作られた「近代化論」（表－4）を下敷きにして急激に押し進められてきた。第二次産業を基幹産業として国民経済を豊か

にするという「近代化論」的な国の方策は、地域開発の面では、「企業誘致」や道路をはじめとしたインフラ整備にかかる公共投資とによる複合的な手法によってなされてきた。その結果、国民経済は大幅に拡大したものの、公害や環境破壊という弊害を生み、大都市圏への人口集中の結果としての地方の過疎化は、地域の存立や地方文化の保存・継承を危うくし、結果として都市化による地方文化の平準化という現象も生んだ。他方、鶴見氏によって提起された「内発的発展論」（表－4）は、"近代化から起こるそれらの弊害を是正する、あるいは未然に防ぐという問題指向がその出発点になっている"概念であり、近代化論では見落とされてきたエコロジーの問題や、文化・伝統という要素が重要であると指摘している。（＊3）

また、その概念について、"住民の生活の必要という面から考えると、これらのエコロジー・文化伝統という点では、それぞれの社会には異なる条件があり、地域の住民の積み重ねてきた伝統がある。その中に近代化のマイナス面を克服しながら発展を目指す「解決の糸口」を模索していく事により、西欧先発国のモデルとは異なる多様な経路の発展の展望が開けてくるのではないか"とも述べている。（＊3）

今日、価値観の多様化が叫ばれ、「もの」から「こころ」の充足を求めている時代にあって、表－4で示した「内発的発展論」の考え方は、地域の開発や活性化をすすめる上での基礎的な理論となり得ると考えられると同時に、表－3『フィールド・ミュージアム成立の要件』で示した考え方と適合している事が分かる。

表－4　近代化論の定義と内発的発展論との違い

＜近代化論＞	＜内発的発展論＞
・全体社会を単位とした分析	・「地域」を単位とした分析
・それぞれの社会の経済成長をもって、近代化の主目標とする。GNP 大＝近代化	・人間の成長を主目標 ――
・自然環境の問題への配慮が欠落	・自然生態系の一部である人間が、自然と調和し、共生可能な生活創造を課題
・前近代の構造が克服される度合いに応じて社会も個人も近代化されたとみなす 類型変換　非合理主義⇔合理主義 個別主義⇔普遍主義 機能無限定主義⇔機能限定主義	・伝統を今日の状況に応じてつくり換えて役立てることが大切だとみなし、再創造する。
・推進者は、行政、企業、軍事、及び知識・情報の各分野あるいは各分野の複合したエリート階層である	・住民と自治体行政、企業家、知識・情報関係者等との相互作用から生じる知的創造性と試行錯誤の実践とに着目する （地域の中のキーパーソン）
・英米の先進国を手本として発展する単系発展説である	・それぞれの地域における発展の経路が異なることを前提とした多系発展説である

鶴見和子：内発的発展論の視点「―内発的発展に関する研究―新たな地域発展理念を探る」
（1991.VOL.4 NO.4）『NIRA 政策研究』より抜粋

表－5　内発的産業形成と比較したミュージアムマネージメント論

	地域活性化から見た内発的産業形成のモデル	地域活性化から見たミュージアム・マネージメント論
成立の要件	・内発性・自律性 ・伝統の再創造 ・キーパーソン ・内発的単位としての地域	・内発性・自律性 ・伝統の再創造 ・キーパーソンと学芸員としての住民 ・学習環境としての地域
構成要素	・新製品の開発 ・流通のネットワーク ・住民意識へのインパクト	・学び合いのコミュニケーション ・状況のデザイン ・体験を通した学び
現象	「もの」を媒介としたリレーションシップ	「知」を媒介としたリレーションシップ
成果	「もの」の生産・販売による地域活性化	「知」のサービスによる地域活性化

そこで、「産業としてのミュージアム」という視点を、美山町と同じ様に過疎化の進む農山村における「地域おこし」という視点から、内発的発展論のいくつかの概念を取り入れた「内発的産業形成に関する調査研究－地域産業おこしの理念とプロセス－」（以下報告書という）との比較の中で論じつつ、ミュージアム・マネージメント論の持つ今日的課題への対応についての優位性を述べたい。

この報告書は、大分県の一村一品運動の様な特産品の開発・販売といった事例を各地に求め、それらの事例を基にして、その展開のプロセスや方法論的側面から共通の要素が引き出され、内発的産業形成のモデルを試論として提示している。（表－5）

他方、「ミュージアム・マネージメント論」の見地から、「フィールド・ミュージアムとしての要件」を整理してみると、同じく表－５の様になる。この表－５を基にして考察してみると、内発的産業形成という考え方が、特産品の開発や流通ネットワークという構成要素が示す通り、特産物（もの）を生み出すプロセスを示しているのに対し、「ミュージアム・マネージメント論」は、学び合いのコミュニケーションや状況のデザイン、体験を通した学びという構成要素から成り立っており、「知」を中心とした「こと」を生み出している事が分かる。どちらも、成立の要件を見る限りにおいては、内発的発展論に依拠しているが、地域活性化という成果が同じであっても、構成要素や生み出す中身という点においては大きな違いが生じている。　次項ではこうした「ミュージアム・マネージメント論」の特質を産業という視点から論じる事とする。

６．「知」のサービス産業としての「ミュージアム・マネージメント論」

本論の事例は、結果的にフィールド・ミュージアムとして成立しているとは言え、その活動を始める目的としては、地域の活性化につながる事を期待していた事は想定できる。

この時、“地域産業の役割としては、生産活動を活発にし、住民の糧となる「所得」を生み出す事を通じて、地域の経済的な存立基盤を支える”（＊４）とすれば、参加・体験プログラムやグリーン・ツーリズム、あるいは、林業従事者や茅葺き職人の増加といった現象は、「フィールド・ミュージアム」という全体的な“システム”から生み出され、それが経済的な効果を生んでいると解釈できる。

この点は、これまでの様な独立した企業スタイルではない“ミュージアムというシステム”に内在している産業的な側面を明示している事であり、それぞれの事柄が個別に活性化されたというよりは、“ミュージアムというシステム”の中で有機的につながる事によって生じてくる、相乗効果や波及効果として捉える方が妥当である。

また、内発的産業形成のモデルは、農産物という「もの」の生産・販売という事から見て、第一次産業の再活性化という面が強く、他方、ミュージアム・マネージメント論においては、その活動内容から見て「知」をサービスしている第三次産業としての側面が強い。もちろん、林業の振興や特産品の開発という点では、第一次産業の再活性化的といった面もあるが、この点についても、「知」のサービスという方向が「かたち」として現れたものとして理解できる。（この点については、ミュージアムにおける「富の概念」の項でくわしく触れたい。）

ミュージアム・マネージメント論による地域開発の考え方は、同じ内発的発展論に基礎を置いている内発的産業形成のモデルとは違って、地域の文化や伝統を大切に守り、継承し、その事を通じて生計を立ててゆくという地域社会の構造が、「フィールド・ミュージアム」という枠組みによってより鮮明になり、いくらかの条件が付いているとは言え、自然との共生や、循環型社会の形成、生涯学習社会への対応という意味に於いても、これからの地域産業の一つの方向性を示していると言えるのではないか。

特に、地域の生活文化に根ざした参加・体験プログラムは、地域全体を有機的に連動させ、一つのシステムとして成立させるという役割を担っていると同時に、参加・体験プログラムやグリーン・ツーリズムによって行われている住民と来町者との交流は、伝統や生活文化と言う「知」の成果を媒介にしている事によって、そこには「相互に学びあう」というコミュニケーションが成立している。住民は、来町者に教えたり説明しなければならないという現実的な必要から学び、来町者は、新しい経験や未知の世界に触れるという点で、知的好奇心によって学んでいる。

これまでの産業が、主として経済の発展を映し出していたのとは異なり、ミュージアム・マネージメント論に基づく「知」のサービス産業という考え方は、「ミュージアムというシステム」自体のメカニズムによって、経済的効果と共に、もう一つの成果として「学び合いのコミュニケーション」が生み出されていた。

本論を始めるにあたって、最初の項でその問題意識を述べた源泉は、「ミュージアム・マネージメント論」に内在している「知」のサービス産業が生み出す２つの富が、これからの社会のあり様を考えるキッカケになるのではないかという予感からであった。言ってみれば、学校のクラブ活動での学び方とよく似た「学習的文化活動」とでも言えるものだろう。

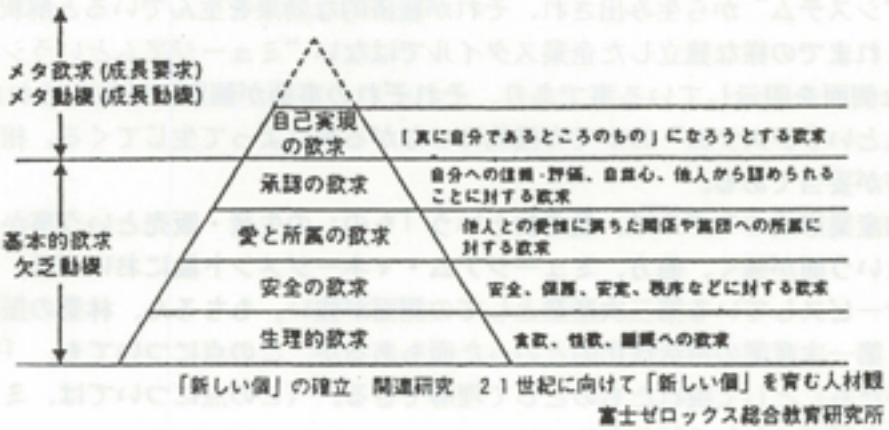
現代社会にあって、“人はパンのみに生きるにあらず”というこの聞きなれたフレーズの持つ意味は重要性を増し、「ミュージアム・マネージメント論」に内在している「富の概念」の重さと必要性が映し出されてきた。

7．ミュージアムにおける「富の概念」

これまでの論考によって、本論の事例が「フィールド・ミュージアム」として成立している姿や、「ミュージアム・マネージメント論」の側面や、その結果として「知」のサービス産業という視点と、そこに内在する二つの「富の概念」を発見した。

一つは「経済基盤の形成」という「富」であり、もう一つは「学び合いのコミュニケーション」から生じる「富」である。最初の「富」は、参加・体験プログラムや、グリーン・ツーリズムへの参加、あるいは、特産品の販売や交通機関の利用などによる、直接的に「所得が増える」という「富」の姿である。もっとも、この「富」を形成しているものが、重要伝統的建造物群という独自の建築文化であり、美山町という農山村の生活文化、あるいは、参加・体験プログラムに変化した「知の成果物」である事は、注目すべき点である。

また、もう一方の「学び合いのコミュニケーション」から生じる「富」は、住民と来町者との相互作用の中で、共に享受できる「富」でもある。



図－5　マズローの動機理論における欲求のヒエラルキー

成熟社会にあって、人々はこころの満足を得るために様々な行動をし始め、この事が、本論の事例を成立させている要因である事は、疑いのないところではあるが、その行動を起こす内的背景とはいわゆるマズローの「欲求の五段階説」（図－5）で語られている自己実現への欲求であり、あるべき自分になりたいという欲求が、「学び合いのコミュニケーション」を成立させている。佐伯氏は、このコミュニケーションという事について、一つは互いの気分や気遣いを交わすコミュニケーション（情感的交流）であり、他方は、定型化した仕事を効率的に実行していくためのコミュニケーション（作業的交流）であるという。“一見作業的交流がメインになっている場合でも、何かしら驚きや感動、さらには背後の未知なる世界に対する畏敬の念が込められている場合がある”と述べ、“どんな情報にもその情報を生み出し、意義づけている文脈があり、背後に人びとの歴史を積んだ営みがある。何気ない言葉の背後に、そのような文化の違いを発見し、それなりの歴史を感じとり、「理解」できる事の背後にあるもっと大きな「理解できない事」の存在に気づき、それを「畏れ敬う」のである。”とも述べている。（＊6）また、「学び」というメカニズムが、暗黙知から形式知（＊7）へ向かう経路であるとすれば、本論の事例は、まさにリアリティーの中で、リアリティーを生きている住民が、学芸員としての役割を演じながら交流する訳であり、「学び合いのコミュニケーション」は、まさにこの経路をたどる出発点と言えるのではないか。

住民の現実的必要からの学びと、来町者の知的好奇心からの学びとが交流しあう時、それぞれが多様な価値観と出会い、お互いがお互いの価値観を広げ、感性を磨き、人間的成長やこころの豊かさを育んでゆく。

この「学びのプロセス」が、既有知識との融合によって自らの価値観を自己組織化し、自己実現へと向かわせていると同時に、セオリー化してしまっている「教育」の概念にインパクトを与え得る視点である。

マズローは、晩年、自己実現のあとにくるものとして「自己超越」という概念を提示し、そこに至るまでの「至高体験」についても述べている。（＊5）

本論の事例で紹介したキーパーソンや住民が、不便さや指定を受ける事による規制を顧みず、文化遺産を継承しながら町の発展を図る事に合意した点や、「学び合いのコミュニケーション」を支えている住民の意識の底流には、経済基盤の充実や自己実現と言った事の他に、この活動の中で「至高体験」と呼べる様な経験をし、「自己超越」という意識が働いているのではないかと考えられる。

つまり、「産業としてのミュージアム」のもう一つの「富の概念」とは、「学び合いのコミュニケーション」という姿をした、人格形成へ向かわせるメカニズムそのものであった。

8．結びとして

今回、本論をまとめるにあたって常に意識下にあった事は、「ひと」と「意識」という問題であった。

マズロー氏は、「自己実現」から「自己超越」へのベクトルとして示し、佐伯氏は、“今日の動機づけ心理学がもたらした重要な示唆は、人間は欲望の充足や安楽な生活を望んでいるのではなく、ものごとの原因になり、他人の役に立ち、自らの人間的成長を遂げる事を望んでいるということである”（＊8）と述べている。

ミュージアムというものが「ひと」を対象にした環境であるならば、調査研究や展示・教育普及活動等による制度論的・形式論的機能集積の場という考え方や、教える者と教えられる者という枠組みの中にあるミュージアム・マネージメントの考え方から脱し、マズロー氏や佐伯氏が示したごとく、本来的に「ひと」は常に成長しようとする能動的で有能な存在として見なした上で、「いかに引き出すか」という視点に立った展示や普及活動、マネージメントのあり方を構築してゆく時期に来た。

また、本論で述べたフィールド・ミュージアムでの美山町の事例が示した事は、ミュージアムの概念やマネージメントの考え方とは、近代博物館論を脱した「ソフトインフラ」（＊9）そのものであり、地域社会の中で「知をいかにマネージメントするか」という、「ミュージアムというシステム」そのものがミュージアムの本質であるという事も示していた。

最後に、学会事務局の塚原氏には美山町での事例紹介と仲介の労をとって頂いた。この機会にお礼申しあげる。

参考文献

＊1　倉田公裕　博物館社会学（序）－その基礎論－『博物館と社会』（博物館学研究会編）　1972
＊2　『美山町統計書』　1997
＊3　鶴見和子　内発的発展論の展開『内発的発展に関する研究－新たな地域発展理念を探る』総合研究開発機構　1991 Vol.4 No4
＊4　『内発的産業形成に関する調査研究－地域産業おこしの理念とプロセス－』総合研究開発機構　1990
＊5　上田吉一：『人間の完成・マズロー心理学研究』1988
＊6　佐伯胖：『新・コンピュータと教育』
＊7　「21世紀の人と空間」（知的生産性フォーラム'90講演録）　株式会社内田洋行　1991
哲学者マイケル・ポランニーが提唱した言葉で、この言葉を引用しながら、野中郁次郎氏は、“知の創造というのは、われわれの持っている世界観や思いとかメンタルモデルといった暗黙知を言語化する、つまり、形式知に変換することと、いったん言語化したものを反省し、体験し、本当に自分のものにするという事からなる回転運動だと考えれる”と、フォーラムで述べている。
＊8　佐伯胖：「機械的であることと教育的であること」岩波講座　教育の方法10　所収1987
＊9　（財）東北産業活性化センター編：『ソフトインフラ－都市の利便性と風格を決める』
本書の中で、この言葉の定義を、「生活・文化・産業等の諸活動および活動主体の実効性を直接・間接に高める、社会の基礎的な仕組み・制度・考え方・アイデア等の知的システム。」としている。